

〔注意〕

※ 解答はすべて解答用紙に記入すること。

※ 特にことわった場合をのぞいて、解答の字数指定では「」や「。」その他記号も一字に数えます。

次の――線のカタカナは漢字に直して書き、漢字はその読みをひらがなで書け。

- (1) 世の中のアワレが身にしみる。
(2) 来客をカンゲイする。
(3) 急ブレーキのショウゲキに備える。
(4) 友人の発言をベンゴする。
(5) 選手を代表して宣誓する。
(6) 卑屈な考え方を改める。
(7) 離島との間に橋が架かる。
(8) 硫黄のにおいがする。

「悔・慥」が別解となりますので変更してください。

漢字が読めなくても例文から答えがわかってしまいそうです。
変更してください。

作問がしづらいように
あれは、

※

大問二、三の修正につきまして、現状ほど駿台模試の形にひたたりと合わせる必要はありません。
合わせていたいただきたいのは、記述の字数や、記述、抜き出し、選択の設問数（大きくちがわなければOK）、
国語の知識を駿台で問うていければ上管練にも盛り込む、選択肢の数（駿台から採なら上管練も5択）、配点
二 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。
といった点で、他は文章によって適切と思われる内容、形で作問して
いただいてかまいません。

初めてエウステノプテロンの名が報告されたのは一八八一年と古く、四肢動物の祖先、あるいはそれに近い魚として有名になった。
そのためしばしばエウステノプテロンは、陸へ上がろうとして体の半分を沼から出している姿で描かれてきた。この絵を見た人も多く
いるだろう。

しかし現在では、体が流線型であること、眼が横についていることなどから、エウステノプテロンは完全に水中に生息していたと考
えられている。陸にも上がれる水辺の動物は、ワニやカエルのように眼が頭の上のほうについていることが多いのだ。【ア】

もちろん、エウステノプテロンが陸上に上がれると勘違いされたのには理由がある。それはエウステノプテロンの胸ビレと腹ビレで
ある。そのずんぐりとしたヒレには、つけねに一つ、その先にAつの骨があった。その骨の形もまた、上腕骨、橈骨、尺骨に似て
いたのである。【イ】

四肢動物の肢の骨のパターンである「一本、二本、手首の骨、指の骨」と比べると、ハイギョは最初の「一本」だけだったが、エウス
テノプテロンは最初のAつ、つまり「一本、二本」があった。エウステノプテロンは、腕（あるいは脚）を持つ魚だったのだ。陸上
で生活していたと勘違いされても無理はないだろう。

イメージしてほしい。あなたはうつぶせに倒れている。起き上がらなくてはならない。

あなたはまず、手のひらを床につけて体を起こすだろう。指は使わなくてもいい。指は床から浮かせていてもいいけれど、曲げた手
首を床につけないと、起き上がることは困難だ。

もし腕や脚がただのまっすぐの一本の棒だったら、パタパタと手足をバタつかせながら床をころげまわることしかできない。起き上
がるためには、じつは腕や脚を曲げることが必要なのだ。

とくに手首を曲げることは重要だ。手首があれば、起き上がることができる。そして、腕立て伏せができる。【ウ】
腕立て伏せなんて、つまらないことのように思われるかもしれない。でも腕立て伏せができれば、つまり手首があれば、水面から顔
を出すことができる。【エ】

でも、なかなか腕立て伏せができる魚の化石は見つからなかった。もし見つければ、それは魚類と四肢動物をつなぐ中間的な化石になる。そしてついに二〇〇四年に、まさに願っていたような魚の化石が報告された。それがティクターリクだった。

「一本、二本、手首の骨、指の骨」と比べると、ティクターリクにないのは「指の骨」だけだった。なんとティクターリクには未発達ながらも「手首の骨」、つまり手首があつたのである。まさにエウステノプレロンと四肢動物の中間型であつた。

さて次は、いよいよ指だ。地球上で最初の指は、イクチオステガやアカントステガに見られる。ともにデボン紀後期（約三億六千五百万年前）にすんでいた初期の②両生類だ。

ここで少しだけ、両生類について説明しておこう。両生類は、進化史上最初の、そして完全な四肢動物だ。

両生類はその名のとおり、水中と陸上と両方で生活できる。とはいえ、陸上で生活はできるものの、あまり水辺から離れることはできない。卵は水中に産むし、生まれてからも幼生の時期は水中で生活する。

吸をするようになる。オタマジャクシはエラ呼吸をするが、カエルになると空気呼吸をするのである。【オ】

ちなみに両生類の空気呼吸というのは、おもに皮膚呼吸である。肺は補助的な役割をしているだけだ。中にはハコネサンショウウオのように、まったく肺がないものさえいる。

このように両生類は、完全に水中で生活しているわけでもないし、また完全に陸上で生活しているわけでもない。水中と陸上という両方の環境が必要な生物なので、両生類というわけである。

さて、デボン紀に話をもどそう。アカントステガやイクチオステガの肢は、すでに「一本、二本、手首、指」のパターンを持っていた。もはやヒレではない。完全な肢である。アカントステガは指を八本、イクチオステガは七本も持っていたのだ。

しかしアカントステガは、大きい尾ビレも持っていた。したがって完全に水中で生活していたと考えられる。こんな大きな尾ビレを引きずりながら陸上を歩いたら、たちまち尾ビレはズタズタになってしまうからだ。しかも骨格の形から見て、アカントステガはエラも持っていたと考えられるのだ。

一方、イクチオステガはアカントステガとは違い、たまには陸上に上がることもあつたらしい。肩の骨は頑丈で、また前肢は後肢よりも大きかった。今のアザラシみたいである。おそらくアザラシのように歩き、水陸両方で生活していたのだろう。

また、理由はよくわからないが、イクチオステガの肋骨は異常に頑丈だった。心臓や肺を囲んで守っている肋骨は、ヒトでは一本一本が離れているし、呼吸をするときには動かすことができる。だがイクチオステガの肋骨は、大きくてお互いに重なり合い、^{*2}コルセットのようになっている。これでは体を曲げることもできないだろうし、とても重たかったにちがいない。C、陸上に上がることはあつたかもしれないが、あまり速く動くことはできなかっただろう。【カ】

まあ当然と言えば当然なのだが、魚は陸に上がるために肢を進化させたのだと、かつては考えられていた。なんといっても四肢動物の肢は、陸上を歩くためにあるのだから。そういう仮定のもとに、^③さまざまな仮説が考え出されてきた。

たとえばこんな仮説があつた。陸上が乾燥して池が干上がることもあるだろう。そのとき魚に肢があれば、歩いて別の池にたどりつくことができたにちがいない。したがって肢は、**水から出るためではなく、D水へ戻るために進化**したのだ。

また別の仮説としては、水中には恐ろしい捕食者がいたというものがある。それらから逃れるために浅瀬に、そして陸上へと進出したのである。そのために肢が進化したのだという仮説である。

でも、なんだか変な話だ。おそらく初期の四肢動物の子ども、オタマジャクシのように水中で生活していたはずだ。そこに恐ろしい捕食者がやってくる。親はスタコラと陸上に逃げてしまう。でも子供は捕食者に食べられ放題だ。こんなことって、あるだろうか。

④現在では、エウステノプレロンもテイクタリクもアカントステガも完全に水中にすんでいたとされている。イクチオステガもほとんど水中にすんでいた。ということは、四肢動物の肢は水中で進化したのではないか。ひよつとして、肢は**E**進化したわけではないのかもしれない。

〔注〕 *1 上腕骨、橈骨、尺骨……四肢動物の骨で、上腕骨は肩からひじまでの部分にある骨、橈骨と尺骨はひじから手首までの部分にある骨のこと。
*2 コルセット……整形外科で、背骨の固定や矯正などに用いる器具。

問七

易しすぎるのでご再考ください。たとえば、

空欄にして、適語補充選択などもよいかもしれません。(難度が上がる良い案が

あれば、もちろん別案でも構いません。)

この2ヶ所を両方とも

易しすぎるので「ご再考ください。」

易しすぎることに、また
理科の知識があれば

問一 次の一文は、本文中のある段落の最後から抜き出したものです。戻す場所として最も適切な箇所を本文中の【ア】～【カ】から一つ選び、記号で答えなさい。

浅瀬にすんでいる動物にとつては、獲物を見つけたら呼吸したりするとき、とても役に立っただろう。

問二 線①「理由」とありますが、これについて次のように説明するとき、
a c に当てはまる最も適切な表現を本文中からそれぞれ指定字数でさがし、抜き出して書きなさい。

エウステノプロテロンは、a (七字) の骨の形が四肢動物の骨に似ているので、ハイギョなどの魚と比べてb (十三字) に近くなっており、c (十二字) と考えることができたから。

問三

二か所ある A に共通して当てはまる最も適切な数字を、漢数字で書きなさい。

問四

線②「両生類」とありますが、その説明として適切なものを次からすべて選び、記号で答えなさい。

- ア イクチオステガやアカントステガなど、デボン紀後期にすんでいた生物のこと。
- イ 生物が進化してきた中で最初に発生した、完全な四肢動物と言える生物のこと。
- ウ 両生類という名前が示すとおり、水中だけでも陸上だけでも生活できる生物のこと。
- エ 空気を呼吸する際はおもに皮膚呼吸を行うので、肺をもっていない生物のこと。
- オ 生きていくうえで、水中と陸上という両方の環境を必要とする生物のこと。

問五

B C に当てはまる最も適切な表現を次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

易しすぎます。ただ、接続表現の問題はほいので、別の所で「ご再考ください。」

- ア さらに
- イ むしろ
- ウ もしくは
- エ たとえば
- オ したがって
- カ しかし

問六

線③「さまざまな仮説」について、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1)

「さまざまな仮説」について筆者が簡潔に表した七字の表現をこれよりあとの本文中からさがし、抜き出して書け。

チなさい

(2)

(1)で答えた表現を筆者がしているのはなぜですか。その理由を八十字以上百字以内で説明せよ。

問七

Dに当てはまる最も適切な語を本文中から一字でさがし、抜き出して書け。

チなさい

問八

線④「現在では、エウステノプテロンもテイクターリクもアカントステガも完全に水中にすんでいたとされている」とありますが、その理由を次のように説明するとき、

a . b

キなさい

エウステノプテロンは体の形や a などが陸上に上がれる生物の特徴と異なっており、テイクターリクは水面から顔を出すことができる程度と考えられ、また、アカントステガは陸上を歩くのに適切でない大きな尾ビレがあるうえに、骨格の形から見て、 b から。

問九

Eに当てはまる最も適切な表現を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 生活のために

イ 歩くために

ウ ヒレから

エ 陸で暮らす中で

オ 目的があつて

問六 (複製)

さまざまな仮説

誤脱を、本文内容からいかにもありそうなものに変更して難度を上げてください。

「さまざまな仮説」といって押さえておいて、(2)では「別の仮説」の内容のみ答えさせるのはおかしいのではないだろうか。なんとか一つの仮説を盛りこもうとした生徒が、うまくできずに(解説にあるように、子供を守れないという共通点の発見には至らずに)変なことを書いて減点となるといふ、読めた子のミスリードを誘う設問となっています。ご再考ください。

三

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

「僕」の家に、母親の友達の宮本が、娘の香奈に関して電話をかけてきた。電話のあとで、母親は「僕」に内容を話しはじめた。

「交通事故に遭っちゃったの」

ゆうべ自転車じきくで塾から帰る途中、原付バイクと出会い頭がしらにぶつかりそうになった。あわててハンドルを切ったはずみで転んでしまい、膝ひざを骨折した。

「救急車も来たりして大変だったみたい」

ゆうべのサイレンを思いだした。おふくろは僕の向かい側に座って、誰だれが聞いているわけでもないのに、「それでね」と声をひそめてつぶけた。

「原付バイク、トンタマ*1の生徒が運転してたんだって」

「マジ？」

「救急車もその生徒が一一九番して呼んだんだけど……トンタマってバイク禁止よね？」

「うん、見つかったら一発停学」

「三年生しかないんだし、受験前にバイク乗り回してる暇ひまなんてないでしょ。だから、違ちがうんじゃないのって言ったんだけど、でも、ほんとにトンタマの生徒で、宮本さんは生徒手帳も見せてもらった、って」

「誰だったの？」

「篠沢さんも宮本さんから聞いただけだし、とにかくびっくりしちゃって、名前聞いたけどすぐに忘れちゃったみたいなんだけど……あんな、誰か心当たらない？」

僕は黙り込んだ。ドカの顔が——①——
「こういうときにかぎって、にこやかに笑う顔が、浮かんだ。」

始業のチャイムが鳴っても、ドカは教室に姿を見せなかった。

入学以来の無遅刻無欠席記録が途切れてしまった。

「あいつ、食い過ぎで腹こわしたんじゃないかねえのか？」と笑うヒコザは、まだ交通事故のことは知らないようだ。教えてやったほうがいいのかどうか、よくわからない。それにより、ドカが事故を起こしたと決まったわけではない。

朝のホームルームでも、クラス担任の矢野先生はなにも言わなかった。でも逆に、黙ったままというのが不自然な気がしなくてもない。

②休み時間のたびに教室を回って欠席者を確かめた。ついでに、さりげなく、「原チャリに乗ってる奴とかっていなかったっけ」「なんか変な噂とか、今朝聞いてない？」と確認した。昼休みまでに結果がわかった。三年一組から六組まで、学校を休んでいるのはドカだけだった。原付バイクをこっそり乗り回しているのもドカ一人。

五時間目の予鈴が鳴って教室に戻る途中、思いきってドカのケータイに「元氣？」とメールを入れてみたが、放課後になっても返事は来なかった。

こうなったら、あとはもう正面突破で事実を確かめるしかない。職員室には、その無謀な体当たりを受け止めてくれるはずのひとがいる。

足早に廊下を歩きながら、ゆるんでいたネクタイを締め直した。呼び出しや日直や掃除当番以外で、要するに自分から職員室を訪ねるのは、トンタマに入ってから初めてかもしれない。

職員室のドアを開けて見回すと、ジン先生がいた。教頭先生の真ん前の席だった。他の先生たちの世間話に加わずに、一人で現代文の指導書を読んでいた。

背中を丸め、地肌の透ける後頭部を陽射しにテカらせた姿は、生徒相手に青春だの人生だのをアツく語っているときより、ひとまわり小さく見える。居心地悪そうで、つまらなそうで、ちよつとさびしきところもある。それを見て、③なんとなくうれしかった。理由はよくわからない。でも、もしも職員室のドアを開けた瞬間、他の先生たちとおしゃべりしているジン先生を見たら、そのまま引き上げてしまつたかもな、と思う。

席に近づくと、声をかける前にジン先生は本から顔を上げた。おう、と少しだけ頬をゆるめ、生徒にではなく友だちと話すようにつぶ

けた。

「ドカくんがいないと、教室、静かだろ」

「あの……そのことなんですけど……」

先生は「うん？」と僕を見た。最初は①怪訝^{けげん}そうな顔だったが、僕が目をそらさずにいると、「まいっちゃったよな」と苦笑した。

その一言で、わかった。唇^{くちびる}を噛^かんでうつむいた僕に、先生は隣^{となり}の席の椅子^{いす}を勧めかけて、「いや、それより外に出るか」と言った。僕もそのほうがよかった。

「ヒコザとかムクちゃんにも教えてやっていいですか」

「じゃあ、中庭で話すか」

「……はい」

「なんだ、しよぼくれた顔して。だいじょうぶだ、だいじょうぶ」

ジン先生は席を立つと、僕の肩^{かた}をポンと叩^{たた}いて歩きだした。ガニ股^{また}気味にゆさゆさと歩く②先生の背中が、さつきより微妙^{びみょう}に大きく、分厚^{ぶんこう}くなった。

ドカの事故は、ゆうべのうちに警察や病院に駆けつけた矢野先生から、朝の職員会議で報告されたらしい。

処分は三日間の自宅謹慎^{きんしん}。就職が内定しているということで、停学からワンランク軽くなった。香奈ちゃんの膝の骨折も、年内いっぱいは入院が必要でも、手術をしたり後遺症^{しゅうしやう}が残ったりするようなものではなく、その面では、最悪の事態は免^{まぬか}れたわけだ。

事故そのものも、どちらかといえば香奈ちゃんの独り相撲^{ひとすもう}だった。塾の帰りに、車道を自転車走^{まわ}っていて、途中で向こうに渡ろうとして自転車漕^こぎながら後ろを振り向いたら、ドカの原付バイクがちやうど角を曲がってきた。距離^{きょり}は十分あったが、急にヘッドライトのまぶしい光が目^めに飛び込んできて、あわてて手をかざして目をかばったら、片手ハンドルで体のバランスがとれなくなって転んだのだ。

「じゃあ、べつにドカが百パーセント悪いってわけじゃないのか」

僕とヒコザは

A

顔を見合わせたが、ムクちゃんの表情は暗く沈^{しず}んでいた。

埋めてください。

「ムクちゃん、どうしたの？」

「その女の子、クリスマスも入院してるんですね……」

ジン先生も「そこなんだよ」とため息交じりに言った。「ドカくんもそのことで落ち込んでるんだ」

ドカの両親はすぐに香奈ちゃんの両親に謝罪して、治療費や慰謝料のことも親同士が話し合っ、うまくまとまりそうだという。

ただ、問題が一つ――。

「その子、ピアノを習って、クリスマスに発表会があるんだ。それをすごく楽しみにしてたんだけど、退院も難しそうだし、入院中は練習もできないから、あきらめるしかないってことになったんだ」

「でも、それはしょうがないっていうか、また今度のチャンスってことで……」

ヒコザが言いかけるのをさえぎって、「ないんだ」と先生は言った。「冬休みに引越して、三学期から転校するんだ、その子」

だから、「今度」や「次」はない。十二月の発表会が玉川ニュータウン最後の思い出になるはずだった。それが、事故のせいで台無しになってしまったのだ。

香奈ちゃんは、もちろんひどく悲しんでいる。それを知ったドカも、責任を感じて、でもどうすることもできずに、朝から部屋に閉じこもったままなのだという。

僕とヒコザはまた顔を見合わせた。ヒコザの頬はもうゆるんではない。僕の表情も同じだろう。ダッシュでドカの家に向かいかった。ドカに会いたい。ドカの顔を見て、一緒にいてやりたい。僕たちは、どちらからともなくうなずいた。二人とも気持ちは同じだった。

でも、先生はそんな僕たちに釘を刺すように言った。

「まあ、あとはドカくんの両親や矢野先生に任せるしかないよな」

B 埋める

そう言われてあっさり引き下がるわけにはいかない。特にヒコザは、中退騒動のときの借りを返したいのだろう、口をとがらせて反論した。

「友だちにしかできないこともあるんじゃないですか？」

そうそうそう、と僕も隣でうなずいた。^{なぐさ}慰めや励ましを言うつもりはない。現実的になにができるかもわからない。それでも、とにかく会いたい。ドカも僕たちに会いたがつてるんじゃないか、とも思う。中退を決意したヒコザが、黙って学校をやめればいいのに、わざわざ僕とドカに別れの手紙を書いてよこしたように。

「気持ちわかるよ」

ジン先生は一つうなずいてから、「でもな」と諭^{さと}す口調で言う。「いまは誰とも会いたくないって、ドカくんが言ってるんだから」
オレらは別ですよ絶対に、と言いかけた僕を目で制して、つぶけた。

「一人になりたいときに一人にしてやるのも、友だちの役目だ」
僕たちはなにも言い返せなかった。

(重松清『空より高く』による)

〔注〕*1 トンタマ……東玉川高校。「僕」が通っている学校。

問一——線①「こういうとき」が指す内容を、本文中の言葉を使って二十五字以上三十字以内で説明せよ。

問二——線②「休み時間のたびに教室を回って欠席者を確かめた」とありますが、それはなぜですか。その理由を七十字以内で説明せよ。

現状では解答例のように書くかなくても十分だと考えられます。解答の赤入れをご確認ください。

問三

——線③「なんとなくうれしかった」とありますが、このときの「僕」について説明したものととして最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

誤肢がわからずすいません。紛らわしくご修正ください。

ア ふだんは自分たちに青春だの人生だのをアツク語る、いかにも非の打ちどころがなくて立派そうにしているジン先生も、自分の実際の人生ではいろいろなやみをかかえているのだとわかって共感している。

イ ジン先生に対しては、他の先生たちに対するものとはまるで異なる気持ちを感じているので、職員室でも他の先生たちと同じようなことをしていない何か変わった存在でいてほしいように感じている。表現が強すぎて不致感本文のがあります。

ウ 職員室がゆうべの交通事故のことでさわぎになってなどおらず、ジン先生の様子もいつもと特に変わりがなかったのも、やはりドカが交通事故を起こしたというのは勘違いだったのだと安心している。

エ 他の先生たちは世間話に興じていても、それに参加せずに一人で熱心に現代文の指導書を読んでいるジン先生が、誰よりも熱心で真面目な先生だとわかって、自分の好きな先生としてほこらしく感じている。

オ 情熱的などころしか見せたことのないジン先生が、職員室にいるときははずいぶんとつまらなくてさびしそうに見えるので、自分たち生徒がそばにいないとさびしいのだとわかって、照れくさくなっている。

問四

——線④「怪訝そう」の意味として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 理由や状況などがわからず不思議そう

イ 何かたくらみがあるのかと怪しんでいるような

ウ 自分の思い通りにならずに不愉快そう

エ 真実をごまかそうとして必死でいるような

オ 思いやりにあふれてとても優しそうな

少しズレを感じます。不審、いぶかしと不思議は少しニュアンスがちがわないでしょうか。

→ 易しにするので「ご再考ください。」
A の位置では他の気持ちで考えずらく、どうしても易しくなるかと思ひますので、空欄の位置から見直してください。
あるいは空欄補充でなくともかまいません。

問五

線⑤「先生の背中が、さつきより微妙に大きく、分厚くなった」とありますが、それはなぜですか。その説明として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

A 指導書を読むのがつまらなくて仕方なかったジン先生は、ドカの事故のことで授業の準備を中断できて喜んでいたから。

イ ドカのことと不安をおぼえる「僕」にとって、励ましてくれるジン先生は安心させてくれる存在として目に映ったから。

ウ 他の先生たちといると居心地が悪くて小さくなってしまいうジン先生は、生徒に対しては威勢が良く、元氣一杯になるから。

エ 職員室を訪ねたことで緊張していた「僕」だが、職員室から出られることになった解放感で気持ちが軽くなっていったから。

オ 席から立ちあがって歩きだしたジン先生が「僕」のすぐそばを通りすぎ、距離が近くなった分だけ大きくなって見えたから。

問六

A に当てはまる最も適切な表現を次から一つ選び、記号で答えなさい。
ア 腹を立てた イ がっかりした ウ ほっとした エ しよんぼりした オ 耳を疑った

問七

B に当てはまる最も適切な表現を次から一つ選び、記号で答えなさい。
ア そうですね…… イ いや、でも…… ウ 任せてください

エ 早く解決してほしいです オ 信用できません

問八

線⑥「慰めや励ましを言うつもりはない。現実的になにができるかもわからない。それでも、とにかく会いたい」とありますが、これと同じ気持ちを表したひとつづきの三文をさがし、はじめの五字を抜き出して書け。

易しすぎるので問わない。代わりに P.10「針を刺す」を空欄としてください。

正答部分にも「会いたい」があり、易しすぎます。ご再考ください。

誤肢をもっと紛らわしくしてくださ。

問九

本文の登場人物と表現についての説明として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「僕」は、交通事故を起こしたらしいクラスの友だちのことを真剣に心配し、自分のことは二の次にしてとにかく助けになりた
いと思う、友情に厚い人物として描かれている。

イ 「僕」の母は、交通事故の話聞いて夢中になり、事故の相手が「僕」が通う学校の生徒ではないかと、状況を懸命に「僕」から
聞き出そうとする好奇心の強い人物として描かれている。

ウ ジン先生は、生徒たちからはしたわれているが、青春や人生を語る指導方法が他の先生たちからはけむたがられており、職員室
では誰とも話をしない変わった人物として描かれている。

エ 本文の初めは「僕」と母の会話、半ばは「僕」とジン先生の会話、最後は「僕」とヒコザの会話を中心に展開し、それぞれの相手
に対して「僕」がどのように感じているかが表現されている。

オ 本文は「僕」の視点で展開するが、「うれしい」「悲しい」のように「僕」自身の心情を直接述べることは少なく、言動や描写な
どによって心情が伝わるように表現されている。

四 次の古文を読んで、あとの問いに答えよ。

陽勝仙人の祖、本国にして病に沈みて苦しみ煩ふに、祖歎きて云はく、「我れ、子多しと云へども、陽勝仙人其の中に我が愛しき子也。若し、我が此の心を知らば、来たりて我れを見るべし」と。陽勝、通力を以て此の事を知りて、祖の家の上に飛び来たりて、法花經を誦す。人出でて、屋の上を見るに、^②音をば聞くと云へども形をば見ず。仙人祖に申して云はく、「我れ、永く火宅を離れて人間に来たらずと云へども、^③孝養の為に強ちに来たりて、經を誦し詞を通ず。月毎の十八日に、香を焼き花を散らして我れを待つべし。我れ、^④此に來たり下りて、經を誦し法を説きて、父母の恩徳を報ぜむ」と云ひて、飛び去りぬ。

『今昔物語集』による

〔注〕 *1 祖……親。

*2 本国……故郷。

*3 見る……みとる。死に際に付きそう。

*4 通力……神通力。超能力。

*5 火宅……安らぎのない現実世界を、火事で燃える家にとえたもの。

*6 人間……人間の住む世界。人間界。

*7 強ちに……無理に。

*8 烟……けむり。

かわいい

問一

線①「愛しき子也」の意味として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えよ。

ア 最愛の子だ

イ かわいいそうな子だ

ウ ひどい子だ

なさい

エ まずしい子だ

オ おそろしい子だ

問二

線②「音をば」を現代仮名遣いに直して、すべてひらがなで書け。

問三

線③「孝養の為に強ちに來たりて、経を誦し詞を通ず」とありますが、陽勝仙人がこのようにした理由を次のように説明するとき、
[] に当てはまる内容を十五字以上二十字以内で書け。

と願う親の心を知ったから。

問四

A [] に当てはまる最も適切な語を本文中からさがし、抜き出して書け。

問五

線④「此」が指す内容を次のように説明するとき、
[] a [] b [] に当てはまる最も適切な語を、本文中からそれぞれ指定字数でさがし、抜き出して書け。

a (二字)

b (一字)

の屋根の上。

問六

本文の内容に当てはまるものを次から一つ選び、記号で答えよ。

ア 陽勝仙人の親は、陽勝仙人が家を捨てて出ていったことで自らを責め、心身の病に苦しんだ。

イ 陽勝仙人は、神通力をこめた法華経を唱えることで、亡くなりかけていた親を回復させた。

ウ 陽勝仙人の声を聞いた人が屋根の上を見たが、そのときはすでに仙人はいなくなっていた。

エ 陽勝仙人は親のために無理をしてやってきたが、もう二度とは来られないと親に告げた。

オ 陽勝仙人は毎月十八日に香をたき花を散らしてほしいと親に告げて、飛び去っていった。

数字・アイテムが出てくるのでわかりやすくします。

正答肢は別内容にしてください。

表現が不自然なので修正してください。

「屋」と答えた時、家・建て物の意味ととれるとも考えられ、別解になりえないでしょうか。

※設問にあわせて修正ください。

一 へ
解答

- (1) 哀(れ)
(2) 歓迎
(3) 衝撃
(4) 弁護
(5) せんせい
(6) ひくつ
(7) か(かる)
(8) いおう

各2点×8＝16点

二 問一 【エ】

問二 a 胸ビレと腹ビレ

b 四肢動物の肢の骨のパターン

c 腕(あるいは脚)を持つ魚

問三 二

問四 イ・オ

問五 B カ C オ

★問六 (2) なんだか変な話

例

水中にいた恐ろしい捕食者から逃れる目的で
浅瀬や陸上へと進出するために肢が進化したと
いう仮説について考えると、子供にはまだ肢が
ないので、親は逃げられても、子供は食べられ
放題になってしまうから。

〈採点基準〉

① 仮説の、捕食者から逃れる目的で肢が進化したという内容

【2点】

② 子供にはまだ肢がないという内容 【2点】

③ 子供は食べられ放題になってしまうという内容 【2点】

〈正答例〉

水中の捕食者から逃れようとして陸上に行けるように
肢が進化したというが、まだ肢がない子供は逃れられない
のでおかしいし、干上がった池から別の池に移るというの
も、やはり子供にはできないのでおかしいから。(一つめ
の仮説にも適用して述べていても可)

〈減点例〉

水中には恐ろしい捕食者がいたので、それらから逃れる
ために浅瀬に、そして陸上へと進出するために肢が進化し
たのだという仮説は、子供が捕食者に食べられ放題になっ
てしまうのでおかしいから。(②なし)

問七 水

問八 a 眼が横

b エラも

問九 イ

問六(2) 6点
他 各3点×9＝27点

(問四 は完答・順不同可)

(問五 問八 は完答)

「おかしい」といった内容まで必要では。

今の設問では書くことを求められませんが、
書くかと思ひます。設問条件等で工夫を
お願いします。

三

★問一

例 ドカが交通事故を起こしたのではないかと思っ
ているとき。

〈採点基準〉

①ドカという具体的な内容【3点】

②(①が)交通事故を起こしたのではないかと内容(「交
通事故を起こした人物として疑いたくないという内容」で
も可)

【3点】

〈正答例〉

交通事故の話からドカのことではないかと不安を感じて
いるとき。

〈減点例〉

交通事故を起こしたトンタマの生徒がいるのかと考えて
いるとき。(①なし)

★問二

例 ドカが交通事故を起こしたのではないと思いたい
気持ちがあり、ドカ以外に欠席者がいれば、その生徒
が事故を起こしなという可能性も出てくるから。
ドカ

〈採点基準〉

①ドカが交通事故を起こしたのではないと思いたい気持ち
(「ドカが交通事故を起こしたのかどうかを明らかにした
い気持ち」でも可)【2点】

②ドカ以外の欠席者がいるという内容【2点】

③(②の)該当者が事故を起こした可能性があるという内容
【2点】

〈正答例〉

ドカが交通事故を起こしたと決まったわけではない
ので、他の欠席者を調べて、ドカ以外に事故を起こした
可能性のある人がいるかを知らうとしたから。

〈減点例〉

ドカが交通事故を起こしたのかどうかを明らかにし
たい気持ちがあり、もしかしたらドカ以外にも欠席者が
いるかもしれないと思いついたから。(③なし)

問三 イ

問四 ア

問五 イ

問六 ウ

問七 イ

問八 ダッシュで

問九 オ

問一・問二

各6点×2＝12点
他 各3点×7＝21点

四

問一 ア

問二 こえをば

★問三

〈採点基準〉

例 自分の死に際に付きそつてもらいたい

①自分の死に際に付きそうという内容

②(①を)してほしいという内容

必須

なければ減点

修正したい

〈正答例〉

もどつてきて死に際に付きそつてほしい

〈減点例〉

自分のそばにもどつてきてほしい (①なし -1点)

(①②どちらか欠けていたら -1点)

問四 香

問五 a 父母

b 家

問六 才

各3点×6＝18点

(問五 は完答)

各2点×8＝16点

問六(2) 6点

他 各3点×9＝27点

(問四) 是完答・順不同可)

(問五) 問八 是完答)

問一・問二 各6点×2＝12点

他 各3点×7＝21点

各3点×6＝18点

(問五) 是完答)

設問にあわせて
修正してください。

へ解説へ

一 漢字の読み書き

(1) 「哀れ」は、かわいそうな状態のこと。「哀」の音読みは「アイ」で「哀願」などの熟語がある。

(2) 「迎」の訓読みは「むか(える)」。「送迎」「迎春」などの熟語がある。「歓」には喜ぶという意味がある。

(3) 「撃」の訓読みは「う(つ)」。「撃破」「射撃」などの熟語がある。

(4) 「弁」には話すという意味がある。「弁解」「熱弁」などの熟語がある。

(5) 「誓」の訓読みは「ちか(う)」。「宣誓」は、大勢の前で誓いの言葉を述べること。
速和成があります

(6) 「卑屈」は、いじけて、必要以上に自分のことをばかにすること。

(7) 「架」の訓読みには、「か(かる)」のほかに「か(ける)」もある。音読みは「カ」。「橋を架ける」という意味の「架橋」などの熟語がある。

(8) 「硫黄」は特別な読み方。「硫」の音読みは「リュウ」で「硫酸」などの熟語がある。「黄」の訓読みは「き」「こ」、音読みは「オウ」「コウ」。「黄金」などの熟語がある。

二 論説文の読解

《出典》 更科功『爆発的進化論 1%の奇跡がヒトを作った』（新潮社 二〇一六年）による。

著者は分子古生物学者。一九六一年生まれ。化石中に存在するタンパク質やDNAの解析、約五億年前のカンブリア紀における動物の多様化の研究などをおこなっている。主な著書に『「性」の進化論講義』『未来の進化論』『若い読者に贈る美しい生物学講義』などがある。

＊問題作成の都合上、文章を一部改変したところがある。

問一 脱文に「浅瀬にすんでいる」「獲物を見つたり空気を呼吸したりするときに、とても役に立った」という表現があることに

着目する。「浅瀬」、つまり、川や海などの水の浅いところにて、獲物を見つける・空気を呼吸するというのだから、水の中から顔を出すということが書かれていることになる。【ア】は直前で眼のことが書かれているので獲物を見つけることには関係があるが、呼吸とはつながらないので、合わない。【イ】は前後で書かれているのは骨の話であり、この時点では骨と水の中から顔を出すこととの関係はわからないので、合わない。【ウ】は「腕立て伏せ」について書かれているが、【イ】と同様にこの時点では「腕立て伏せ」と水の中から顔を出すこととの関係がわからないので、合わない。【エ】は「腕立て伏せ」ができるこ

問二

設問にあわせて修正

とで「水面から顔を出すことができる」ようになることが述べられたところなので、ちょうどつながる。【オ】は空気呼吸そのものの話をしているので、それについて「空気を呼吸したりするときに、とても役に立った」というのはつながりがおかしいので、合わない。【カ】は「あまり速く動くことはできなかった」という話なので、「獲物を見つたり空気を呼吸したり」という話題とは外れており、合わない。

a は、直後で「…の骨の形が四肢動物の骨に似ている」とあるので、本文からエウステノプテロンの体の中で四肢動物の

骨に似ていると書かれているものをさがす。すると、「エウステノプテロンの胸ビレと腹ビレ」にある骨の形が四肢動物の骨に似ていると述べられている部分が見つかる。

b は、「ハイギョ」

と比較して述べた部分なので、本文から同様にハイギョと比較しているところをさがすと、ハイギョよりも「四肢動物の肢の骨のパターンである『一本、二本、手首の骨、指の骨』に近いと述べられている部分が見つかる。

c は、ここまでの内容

から導かれる結論であり、「エウステノプテロンが陸上に上がれる」と勘違いされた「理由を直接述べたところである。本文で確認すると「エウステノプテロンは、腕（あるいは脚）を持つ魚だったのだ」と述べたあとで、それを理由として「陸上で生活していたと勘違いされても無理はない」とまとめている。

問三

「つけねに一つ、その先に[A]「つの骨」について、次の段落で「一本、二本、手首の骨、指の骨」とあり、ハイギョでは「一本」だけだったが、エウステノプテロンでは、「一本、二本」まであったと述べられている。「つけねに一つ」が「一本」に、「その先に[A]「つの骨」が「二本」に対応しているので、[A]には「二」が当てはまると考えられる。二つめの[A]も、ハイギョでは「一本、二本」の最初の「一本」、つまり一つめだけがあつたが、エウステノプテロンでは「一本、二本」という二つめまでがあつたということなので、やはり「二」が当てはまることになる。

問四

Aは「デボン紀後期にすんでいた生物のこと」が合わない。イクチオステガやアカントステガは確かにデボン紀後期に生きていた両生類だが、カエルは現代に生きている両生類である。イは本文の「両生類は、進化史上最初の、そして完全な四肢動物だ」という内容と一致している。ウは「水中だけでも陸上だけでも生活できる」が合わない。本文では、「陸上で生活はできるものの、あまり水辺から離れることはできない。卵は水中に産むし、生まれてからも幼生の時期は水中で生活する」などと述べられている。エは「肺をもっていない生物のこと」が合わない。確かに肺をもっていない両生類としてハコネサンショウウオが挙げられているが、「肺は補助的な役割をしているだけだ」とあることから、基本的に両生類には肺があるということがわかる。オは本

問五

文の「両生類は、完全に水中で生活しているわけでもないし、また完全に陸上で生活しているわけでもない。水中と陸上という両方の環境が必要な生物なので、両生類というわけである」と一致している。

問五

Bは、直前では「幼生の時期は水中で生活する」と子供のころは水中での生活が中心であることが述べられているのに対して、直後では「大人になると、たいていエラはなくなって、空気呼吸をするようになる」と大人になってからは陸上での生活が中心になることが述べられているので、対照的な内容をつなぐときの力「しかし」が当てはまる。Cは、直前で「とても重たかったに違いない」とイクチオステガの体が重いことを示したうえで、直後では「あまり速く動くことはできなかっただろう」という、前の「重かった」という内容から当然のように導かれる結果を述べているので、オ「したがって」が当てはまる。

に

問六

(1) 直後から二つの「仮説」を紹介したあとで、「でも、なんだか変な話だ」と評価している。そのあと、具体的には二つめの仮説について「変な」ところを説明しているが、同じ理由で一つめの仮説も「変」と考えることができる。

(2) 直後から具体的に説明されている。肢がある大人は捕食者から逃れることができるが、肢がまだない子供はそれができず、捕食者に食べられてしまうことになる。それでは意味がな

問七

いのではないかという指摘^{しでき}である。直接は書かれていないものの、一つめの仮説にも同様のことが言える。干上^ひがった池から別に池に移れるのは大人だけであり、子供はそれができない。つまり、これらの仮説のような目的で肢が進化したのなら子供にも肢があった方がいいはずであり、しかし実際にはそうなっていないので、仮説はおかしいのではないかということである。直後に「戻^{もど}る」とあるので、**D**には、元いた場所が当てはまる。具体的には「池」になるが、これはあくまでたとえの一つであり、川でも湖でも同じことなので、すべてをまとめた「水」が、直前の「水から出るためではなく」とも対応するため最も適切である。

問八

a は、エウステノペロンについて、「体の形」と並んでいるものである。本文では、「体が流線型であること、眼が横についていること」と並んで、それらを理由に「完全に水中に生息していたと考えられている」と述べられている。**b** は、アカントステガについて、大きな尾ビレと並んで水中で生活していたと考えられる理由になるものである。本文では、大きな尾ビレは陸上を歩くのに適さないことを説明したあとで、「骨格の形から見て、アカントステガはエラも持っていたと考えられるのだ」と述べている。

問九

前の部分の「魚は陸に上がるために肢を進化させたのだと、

かつては考えられていた……肢は、陸上を歩くためにあるのだから」という部分と、「肢は**E**に進化したわけではないのかもしれない」が対応していることに着目する。「かつては」肢は「陸に上がるため」「陸上を歩くため」に進化したと考えられていたが、仮説がおかしいと感じられることや、「進化史上最初」の肢のある生き物たちが完全に水中にすんでいたとされることから、「ひよつとして」それは間違いではないかと考えられるようになったということである。したがって、イ「歩かために」が適切。

三 小説文の読解

《出典》重松清『空より高く』（中央公論新社 二〇一二年）による。

著者は小説家。一九六三年生まれ。一九九九年『ナイフ』で坪田^{たけうじ}譲治文学賞、『エイジ』で山本周五郎賞、二〇〇一年『ピタミンF』で直木三十五賞、二〇一〇年『十字架』で吉川英治文学賞を受賞。主な著書に『流星ワゴン』、『疾走』、『カシオペアの丘^{おか}』などがある。

*問題作成の都合上、文章を一部改変したところがある。

問一 あとに続く言葉が「……にかぎって、にこやかに笑う顔が……」であることに注目する。ここでの「……にかぎって」は、「楽しみにしていた外出の日にかぎって雨が降る」のように、

それが起こることが望ましくないときや適切とは言えないときに、ちょうどそれが起こる場合に用いる表現である。したがって、この「こういうとき」は、「にこやかに笑う顔」が浮かぶことが適切ではないときということになる。このときの話題は、交通事故であり、母から「誰か心当たりない？」と聞かれてドカの顔が浮かんだ場面である。「僕」は交通事故を起こした「心当たり」としてドカの顔を思い浮かべたのだが、それが「にこやかな笑顔」だったので「こういうときにかぎって」と感じたのである。

問二

「入学以来の無遅刻無欠席記録」を保持していたドカが欠席したので、「僕」は、やはりゆうべの交通事故を起こしたのはドカだったのではないかと感じている。「ドカが事故を起こしたと決まったわけではない」というもやもやした気持ちがあるために、ドカの他にも欠席者がいないか、つまりドカの他にもゆうべの交通事故を起こしたと考えられる人物がいなかったかを確かめたくなったのである。

問三

直後に「理由はよくわからない」とあるので、「なんとなくうれしかった」理由自体は「僕」自身にも説明がつかない気持ちである。ただし、そのあと続けて、「もしも職員室のドアを開けた瞬間、他の先生たちとおしゃべりしているジン先生を見たら、そのまま引き上げてしまったかも」とあることから、「僕」

設問にあわせて修正

問四

の中には、ジン先生に他の先生たちとは違った存在であってほしいと感じている気持ちがあることが読み取れる。それに当てはまるのはイである。

「怪訝」は、不思議で納得がいかないこと。こうした意味を知らなくても、「うん？」と「僕」を見ているジン先生の様子から、何か疑問を感じているということが読み取れる。アは「怪訝」の意味やジン先生の様子に合っている。イは「何かたぐらみがあるのか」というように生徒に疑いの目を向ける先生として、ジン先生は描かれていないので、合わない。ウは「思い通りにならず」とあるが、ジン先生が「僕」に対して何か思い通りにしようとした場面ではなく、したがってジン先生が「不愉快」になるわけでもないので合わない。エは「真実をごまかそうとして必死でいる」がこのあと特に隠そうとせずドカの交通事故について話していることと合わない。オは「怪訝」の意味ともジン先生の様子とも合わない。

問五

実際にジン先生の背中が大きく、分厚くなるわけではないので、これは「僕」にとつてそう見えたということである。ドカのことを心配し、不安を感じていた「僕」は、ジン先生から肩を叩かれ「だいじょうぶだ、だいじょうぶ」と言ってもらったことで、ジン先生にたよりのようなものを感じたのである。それによって、「僕」の目に映るジン先生の姿が大きく分厚く

設問にあわせて修正

見えたと考えられる。

問六

「僕」とヒコザは、交通事故を起こしたドカのことを心配していた。「べつにドカが百パーセント悪いってわけじゃない」というのは、そんな「僕」とヒコザにとって良いニュースなので、「僕」たちは安心したと考えられる。

問七

直後に「そう言われてあっさり引き下がるわけにはいかない」とあることに着目する。「そう」はジン先生の発言であり、それに対して「そう言われてあっさり引き下がるわけにはいかない」と感じた「僕」の反応が **B** ということになる。つまり、**B**

に当てはまるのは「あっさり引き下がるわけにはいかない」気持ちを表すものということになる。それに該当するのはイとオだが、このあとで「特にヒコザは」とヒコザが「僕」よりも強く反論したことが示されており、その内容が「友だちにしかできないこともあるんじゃないですか？」なので、オの「信用できません」というもつと激しく反論する内容は合わない。

問八

「慰めや励まし」を言ったり「現実的に」なにかをしたりするわけではなく、「とにかく会いたい」という気持ちである。同じように、何かが具体的にできるわけではないがとにかく会いたいという気持ちが表されている部分をさがすと、「ダッシュでドカの家に向かいたかった。ドカに会いたい。ドカの顔を見て、一緒にいてやりたい。」が見つかる。

問九

ア 「僕」がクラスの友だちであるドカのことを「真剣に心配」していることは確かだが、「自分のことは二の次にして」といった内容は本文から読み取ることはできない。

イ 「僕」の「母」が交通事故について話題にし、「僕」に「誰か心当たりない？」とたずねているが、「状況を懸命に……聞き出そうとする」といった様子ではなく、「好奇心」からたずねているというのは合わない。

ウ 「僕」がジン先生を訪ねたとき、ジン先生は職員室で他の先生たちの世間話に加わらずに指導書を読んでおり、居心地悪そうにしてはいたが、「他の先生たちからはけむたがられており」といったことは読み取れないし、世間話に加わっていないかつたのもいつものことかどうかもわからないので、「誰とも話をしない」というのは合わない。

エ 本文は確かに「僕」と母やジン先生、ヒコザとの会話が書かれたものだが、それぞれの相手に対する「僕」の気持ちが書かれているわけではないので合わない。

オ 本文は「僕」の視点で展開しており、傍線部③のように「うれしかった」などと書かれているところはあがるが、そうした直接の心情表現は少なく、多くは「僕は黙り込んだ」「ゆるんでいたネクタイを締め直した」「唇を噛んでうつむいた」などの言動や描写から心情を読み取るように書かれている

ので、合っている。

四 古文の読解

《出典》『今昔物語集』

*問題作成の都合上、表記を一部改変したところがある。

問一 「かなしき」と読むが、用いられている漢字が「愛」である

ことと、「子多しと云へども（子供が多いといえども）」ということから、大勢いる子供たちの中でも最も愛している子供だということであることを読み取る。

問二 「ゑ」は現代仮名遣いの場合「え」に直す。「を」は助詞なので、「お」に直さず、そのままにする。

問三 陽勝仙人の親は「来たりて我れを見るべし」と願っている。

「見る」は「みとる。死に際に付きそう」という意味なので、これを願うときの表現でまとめる。

問四 直後に「烟」とあることに着目する。直前で、「香を焼き」とあるので、けむりを出すのは香である。

問五 陽勝仙人がいるのは、「祖の家」の「屋の上」である。aは「祖」、bは「家」にあたるが、aは二字と指定されているので、「父母」を抜き出す。

問六 アは「陽勝仙人が家を捨てて出ていったことで自らを責め、イは「亡くなりかけていた親を回復させた」という内容が

ないのでそれぞれ合わない。ウは「仙人はいなくなっていた」のではなく、声だけが聞こえて姿は見えないということになっていたので合わない。エは「もう二度とは来られない」とは言っておらず、逆に毎月来るということを言っているので合わない。オは陽勝仙人が親に言った言葉と合っている。

（現代語訳）

陽勝仙人の親が、故郷で病気にかかって苦しんでいたが、親がなげいて言うには、「わたしは子供が多いといえども、陽勝仙人はその中でも最愛の子である。もし、わたしの心を知ったならば、来てわたしの死に際に付きそつてもらいたい」と。陽勝は、神通力をもつてこのことを知って、親の家の上に飛んできて、法華經をとなえた。ある人が（外に）出て屋根の上を見るが、声は聞こえるが姿かたちは見えない。仙人が親に申すには、「わたしは、永久に火宅の世界をはなれて人間界に来ることはないのですが、孝養のために無理に来て、經を読み言葉を交わすのです。毎月十八日に、香をたき花を散らしてわたしを待つてください。わたしは、香のけむりをたずねてここに下りてきて、經を読み仏法を説いて、父母の恩得を報じましょう」と言って、飛び去った。